

労協フォーカスコープ・センター事業団は、第3回拡大理事会（8月5、6日）に向け、理事らに『協同労働がつくる新しい社会』の感想」のレポートを求めました。レポート集から抜粋し紹介します。（労協新聞 松澤常夫）

「今だから思い切って！」

九州沖縄事業本部 金山ふみ
 発刊されて直ぐに手元にとり読み始めました。

表紙を外した時に茶色の本の一面に「労働者協同組合法第一条…」と、目に飛び込んできました。

自然に囲まれ充実した少年時代から、学生時代には様々なアルバイトをして生きたと書かれていましたが、中でも鰻屋さんでの出来事は楽しく読ませていただきました。本当に経験豊富で忙しく歩まれてきたことが面白く描かれていました。

丁度、労働者協同組合時代を読み始めようとしたころ、訃報がとびこんできました。正直、見間違いかと、何度も通知を見直しました。そして、本を読み進められなくなっていました。

少年時代から「辺鄙なところであるが故の人間性、人情の深さに接し、豊かな自然を相手に群れて遊び、共に何事かをするこの楽しさをたつぷりと味わう中で、人が好きになり、思う存分に生きる力を蓄え、自分の人生の最初の個性をかたちづくること」が…と、

記されていました。まさに小さな社会のなかで協同労働という形を作り始めていたのだらうと、とても興味深く、付箋を片手に、わからない言葉が出てきたら調べていくことを繰り返していました。私の手元にある本は、付箋だらけになってしまいました。

特にP122～P126の中に、原則から「仲間」「よい仕事」「地域」「全国的観点」「社会連帯」が書かれています。「働くとは何か・なぜ働くのか、どう生きていくのか」を、常に問い、様々な場面でエールを投げかけてくださる

ときの真顔ながら優しさが湧き出るような穏やかな顔で、「やらなくては」：「から、「一緒にやるんだ！前に進むんだ！」に、変換していく心の支えだったように思います。

また、コンプライアンスに少々欠けても、「みんなが幸せになる社会をつくる。」という、言葉が頭から離れません。「今だから思い切って進むんだ。いくんだよ！」と、本の中から声が聞こえてくるようです。

今現在も、ゆつくりと惜しみながら何度も繰り返し読み、七つの原則のことも、もっと勉強していかなければいけないと実感しています。

幸い、私は現場の組合員と接することが多く、上辺だけでの話には耳を傾けてくれません。身体と心を添えて、心と心を交わす場面を多く体感しています。心をもつて現場の組合員とこれからはも接していきたい、と、更に強く感じています。新しい未来に向けてこれからも仲間と共に「どう生きていきたいのか」を問い続けていきます。

心に残った「協同」の原風景

九州沖縄事業本部 牛草賢二

拝読し、心に強く残ったのは、永戸さんの幼少期の体験に根差した「協同」の原風景でした。理屈や理論ではなく、人間の根源的な暮らしや感情から協同労働を語る文章に、大いに共感を覚えました。

幼い頃、親や周囲の大人たちが互いに助け合い、子どもも自然とその「輪」の一員として育った経験を語っています。農繁期、ともすれば身体ひとつで畑に出る大人たちが、作業の合間に配られる握り飯や「おすそ分け」を介して心を交わし合う場面――それは現代

の個人主義や効率至上主義とは対照的な、人間同士のつながりが当たり前だった時代の象徴だったのでしょう。

『協同労働がつくる新しい社会』を読む事で、協同労働が決して「新しい理論・はたらき方」ではなく、こうした幼い頃の経験や、人と人の信頼・共感が土台にあつてこそ本物になるということを改めて認識しました。

労働者協同組合法、協同労働の推進に携わる立場として、現場で見落しがちな「気持ち」や「共感」を大切にする姿勢の重要性を再確認しました。現場の声―ときに些細な困りごとや雑談、何気ない家族や趣味の話―こそが、協同労働にとつてかけがえのない「営み」なのだと再認識しています。

近代的な組織論や法制度だけにとらわれず、働く一人ひとりの思い、個々の人生経験を大切にした組織運営・現場対話をこれからも心掛けていきたいと改めて感じることができました。

個人的には、永戸さんのたくさんの言葉の中で、「納得のいかない事とは闘う事」「組合員（仲間）の変化・成長を信じ抜く事」「誰かの責任にするのではなく、自主自立を貫くこと」が心に残っており、日々の仕事の指針となっています。

若手一人ひとりの話に耳傾け

九州沖縄事業本部 東翔人

永戸さんとは19年に九州事業本部で開催された若手組合員向けの集まりにお越しいただいた際に、一度だけ直接お話しする機会がありました。

その会議は、事前に趣旨の説明がなく、「何をする会議なのか？研修なのか？」という気持ちのまま参加しました。しかし、参加してみると、永戸さんは私たち若手一人ひとりの話に丁寧に耳を傾け、現場での悩みや思いを聞いてくれました。永戸さんは「所長会議や総代会で、前に立つて話をされる

方」というイメージだったので、話を聞いてくれることがとても嬉しかったです。その会議の中で「若手が頑張らなければいけない。次は誰が仕事を獲得するんだ！」という熱い言葉で、私たちを激励してくれました。

これまで永戸さんのことは、主に先輩たちから聞く「すごい人」という印象しかなく、深く知る機会はありませんでした。しかし、この本を読み、永戸さんが歩んできた少年時代や学生運動の時代、労働者協同組合の歴史的な背景、そして制度化にいたるまでの様々な取り組みを知ること、労働者協同組合が自然にあることの意味を改めて考えさせられました。

仕事拡大など、どうしたら全組合員が自ら動いていくか、自分たちの仕事をどう「よい仕事」として深めていくか。永戸さんは、こうした問いに真っ正面から向き合い、制度や仕組みではなく、「人のつながり」や「信頼」を大切にし、現場の仲間の力を信じて歩んできたのだと感じました。

若手である自分たちが、協同労働を次の世代に手渡していく責任を担っていることにも気づかされました。先人たちが築いてきた道をたどりながら、今の時代に合ったものとして協同労働をさらに発展させていく。その一歩として、まずは自分自身がどう働き、どう仲間と関わるのかを考えながら日々の仕事に取り組んでいきたいです。

重過ぎる遺志だが多くの仲間と

四国事業本部 酒井厚行

私は03年10月に入団し、07年の人事で本部勤務の機会を得た。本部に着任早々、私がどのようにしたいのかを問われる場面があり、文書で自分の考えを提出したところ、「それでいい」と言われ、当時30歳前後の私の背中を押してくださった感じがした。

一方で、毎月開催される部長会議で

「そうじゃない」と詰められることが多々あったように思う。続けて「お前はわかってるだろう」と付け加えられることも多かった。

その後、本部を離れ、理事会や所長会議などでの挨拶で学ぶことが多かった。本書にはそれらで話されていた言葉の数々がちりばめられていた。

なぜそんなに「ハイチオール信者」「カルシウム信者」だったのかについても、なるほどと思い読み続けた。実践して見せることが人を動かすことにつながる、そういうことも学んできた。

20年超にわたる私自身の労協組合員人生の中で、知らないうちに永戸さんの言葉が私の体にしみこんでいたことを再確認する機会となった。

一方で、直接的であれ、間接的であれ、永戸さんの考えに右に倣えができず、自分の正義に従い、永戸さんの考えに背く自分もいた。永戸さんが好きだからこそ、「そうじゃないでしょ」と強く思う部分、場面が何回もあった。その思いを直接伝えることもなかった。

経験してきたことが全然違うが故に、見ている景色の捉え方、目指す世界が異なっていたのかもしれない。本書を通して知る永戸さんの歴史は壮大すぎる。でもこんな社会だからこそ、協同労働を広げていく必要性は一致している。

遺志を継ぐとは言うが、永戸さんの遺志は重過ぎる。一人ではなく、多くの仲間と受け継ぎ、新たな世界を見出ししていきたい。私の反骨精神的な部分に火を燃やし続けてくれた永戸さんに感謝し、その火を灯し続けていくことを本書に約束したい。

ライター借り、「協同っすね」

山陰山陽事業本部 牧野仁嗣

初めて永戸さんと会話を交わしたときのこと、今でも鮮明に覚えています。

私は11年の秋に東京北部事業本部に入団しましたが、入団してからは協同労働や協同組合への理解もなく、自身の不満を法人批判に転嫁するだけの日々を過ごしていました。

そんな折の19年、ある会議の喫煙所でライターを忘れたことに気づき、近くにいた永戸さんに借りた際、「協同っすね」と半分冗談めかして感謝を伝えたところ、永戸さんは穏やかに笑ってくれました。その笑顔は今も印象深く、決して人を馬鹿にしたようなものではない心に残る笑顔でした。

その後、永戸亮さんが北部事業本部の本部長となり、永戸祐三さんとも関わる機会が増える中で、ますます永戸さんの人間力に惹かれていきました。

永戸さんは本当に多様な人々に愛され、慕われていた方でした。永戸さんの意思や想いを少しでも次の世代に繋げるべく、ささやかな私の人生をかけて取り組んでいきます。

本の感想に移ります。

京都の片田舎で生まれた一人の青年が、様々な環境要因を乗り越え、組織を築き、法律をつくり上げるという物語は、まさに庄巻の一言です。

特に印象に残った言葉は、「法律はそれ自体では力になってくれない。我々がどう理解し、どう活かして運動するかによって、法律は生きる。」という一節です。

今、私は様々な事業所と向き合いながら、同じように「一人ひとりの組合員が協同労働を理解し、どう活かして運動するか」が何よりも重要であると痛感しています。そして、そのような場を共に創り出すために、悩みながらも仲間と汗をかきながら実践していきたいと、改めて強く感じました。

事業団で働いて誇り取り戻した

関西事業本部 榎木賢二

労働が単なる生産活動ではなく、人

と人が支え合い、生き方を共有する営みであることを、改めて感じました

特に、事業団では、労働者の誇りを引き出し、輝かすことができる。底辺層ではなかなかできない労働者同士の連帯を作り出せる。これは確かに新しい運動になる！」という言葉には、胸を打たれました。私自身も、事業団で働いて誇りを取り戻した一人ですが、本書に触れて、その意義と可能性をさらに確信しました。永戸さんの想いを継ぎ、現場で共に働くすべての人が誇りを持てる仕組みをつくっていきたいと思います。

今一步外に出る勇氣をもてと

滋賀事業本部 田中紀代子

物語としても面白い。運動家、実践家としての永戸さんが目に浮かぶ。少年時代、学生時代に出会った人、とりわけお父さんの言葉などは永戸さんを形成している。民主主義、人権を大切にし、今日の労働運動にも通じている。学生は社会を根本的に変える力はないかもしれないが社会の矛盾を敏感に感じ取る行動をするという鋭い感覚は全くその通りだと思う。これは若い労働者協同組合が今後進んでいく道でもあるのだと思う。

人とのかわりの中で人は育つ、それはみな同じ。間違っていることもあるかもしれないが、間違っていたら謙虚に修正していく。リーダーとしての存在。30年後50年後を見据えて今を作る。「病院で死ぬということ」の映画上映以後からよく知っている名前の登場で、風景と共に読み進んだ。

赤字を出さない経営、全組合員経営、社会連帯経営と、外堀に社連や協同総研やみんなのおうち構想、シニアワーカーズやらを作り、いっぱいの応援も増やしている。マイクを外し大きな声で、今何が必要かを説いていた姿があった。

巢籠ってはいけなさと何度も聞き、この本にもその思いが書かれている。

仕事拡大、よい仕事、お金にルーズな組織はやがて死んでしまう。正義感いっぱい。生活と地域に焦点を当てて。混沌とした世の中、一步出るのはやめとこ、と思っている人もいっぱいいると思うが、できることから、小さなことから、身の回りにある事実から始めようとも言ってくれている永戸さんの姿勢に勇氣をもらう。

社会保障、税金の使い方、物申すことがまだまだあった永戸さんだった。市民が中心になって介護保険制度を軸に地域福祉事業所を作っていたときのわくわく感。V字回復させた経営。このころの勢いがなくなっているのはとても残念だ。請願活動は頑張ろう。

本当の公共とは市民が作るもの、働くものが作るもの。地域を変える事にはまだまだワーカーズは微力だ。制度委託や指定管理も大切である。今一步外に出る勇氣をもてと、永戸さんが背中を押してくれている本である。

他人事でいいことは何もない

北陸信越事業本部 竹森幸太

冒頭から永戸さんの少年時代を思い浮かべながら、自分が腑に落ちないことは徹底的に上位者にぶつける負けん気の強さにあっけにとられる思いで読み進めていった。

高校時代から人の前に出て頑張る姿が描かれており、その中で得た「本当に真剣に訴えれば真剣に応える仲間も多い」という確信は、大きな場面だったのだろうと思った。

中大の学生運動のくだりで、「大学は学生にとって単なる通過点なのか」を問っている。永戸さんが「物事の根底や本質を見極めること」と常々口にされていたことを思い出す。

全学ストライキを宣言してから多くの学生が「やっぱり、人つてのはすごいな」とみんな思ったのではないか。こうした変化するプロセスは、協同労働における団つくりや地域との関係性の中で多くの仲間が分かち合ったことのある喜びではないだろうか。人の変化や成長を大切にする文化は、今のワーカーズコープの原動力として大切に受け継がれている価値観だと思うた。

いなのとみんな思ったのではないか。

こうした変化するプロセスは、協同労働における団つくりや地域との関係性の中で多くの仲間が分かち合ったことのある喜びではないだろうか。人の変化や成長を大切にする文化は、今のワーカーズコープの原動力として大切に受け継がれている価値観だと思うた。

全日自労・事業団時代には、「自主・自立」「よい仕事」「7つの原則」のルーツを垣間見ることができて、自分が仲間と呼びかけるときには、今まで以上に熱を込めることができる。

労働者協同組合時代の「全組合員経営」のところでは、所長の姿勢を問う言葉があり、今の自分に問いかけられているようで、辛くもあるが、必要なのはこれだなんて思う。私が生まれる前の話であるが、いつの時代も本質的に大切なことは変わらないとも感じた。

全ての時代を通して、永戸さんが当事者性を持った言葉で人を突き動かしていく人生史は圧巻であった。組合員と自分、地域と自分、社会と自分、はたまた自然と自分かもしれないが、その関係性の中に他人事であっていいことは何もない。自分が当事者になっていくからこそ語れることがあるし、そうした姿勢でしか得られない実感がある。これだけは、これからも絶対に忘れてはいけなと思った。

「協同労働」が選択肢として

東京南部事業本部 西尾直樹

幼少期から現在までの過程が克明に描かれており、物語として読み進めてもとても躍動感に溢れたエピソードだらけだった。特に幼少期のエピソードが面白く、永戸さんの人格を形成したのが京丹後の自然であり、何よりお父様の教えそのものだったのではないか

と思った。自ら料理の腕を振るい客人をもてなすことが好きだった永戸さんは、正にお父様やお母様の血を受け継いだのだと感じた。

いだのだと感じた。

大学時代の学生運動については、関係性や活動の内容自体難しく、深く読み解くことは出来なかったが、のちに労働の礎を築く主要メンバーがこのころに出会っていた事はとても興味深かった。葬儀で供花の札に「友人」と書かれた汐見穂幸先生との関係がとても深いものだったことも理解できた。

その後はセンター事業団の歴史そのものであり、中西五洲さんが姪っ子に言われた言葉から地域に喜ばれる「よい仕事」へ向かう取り組みや、全国協議会直轄東葛地域事業団の設立、そして自らを労働者協同組合と定義づけ、労協センター事業団の設立を迎える場面など、歴史的にも意義のある取り組みだった。

この間、永戸さんは徹底して労働者が主体的に働く、労働者が主人公になる働き方を模索していたことがよくわかる。横倉さんや岡元かつ子さんとのやり取りでは、かつ子さんの覚悟が伝わるシーンがとても印象的だった。それは「普通のおばさん」ではなく、立派な「協同労働」のリーダーの姿だった。

また、「捨てるゴミの向こうにも人がいる」に象徴される「よい仕事」について触れられ、「よい仕事」の象徴は中村哲さんの仕事ではないかとあり、医師でありながらアフガンで、医療よりも食料や水、労働など安定した暮らしが必要なのだと感じ土木作業に従事した哲さんの生きざまそのものが「よい仕事」なのだと実感した。

「協同労働の協同組合」時代に入り、改めてだが多くの先人たちの実践のおかげで今があることが分かる。私は15年の中途採用だが、20年の労働者協同組合法成立、22年の法施行を経験できたことはとても大きい。「7つの原則」に加えて、労協法の第1条「目的」に明確に我々の目指すべき姿が描かれ

た。法的根拠の下、労働者協同組合を市民化していく事に喜びと責任感を持って職務につかなくてはと、気が引き締まる思いだ。

そう遠くない未来に、当たり前のように「雇用労働」と「協同労働」が選択肢として広がり、日本中に無数の労働者協同組合が設立されるようになったと、永戸さんの墓前に報告できればと思う。

人間存在への絶対的な信頼

東京三多摩山梨事業本部 扶藺文重

幼少期から学生運動に没頭していく若き永戸さんの語りがとても面白く、「働く者の自律性・主体性・主人公性」を常に求めてきた永戸さんという人格がどのように形成され、どのような想いで、私たち一人ひとりに分け隔てなく愛情を注ぎ鼓舞し続けて来られたのか、永戸さんの生きてこられた時間を分有した想いがした。

社会の理不尽さを所与のものとして、新しい働き方や在り方を自分たちで創造していく、永戸さんが私たちに示し続けてこられた「抵抗と創造」の精神、「自らが自らを磨くという立場を基礎とすることなしに、人間の幸福を考えることはできない」という言葉が印象に残った。

三多摩の事務局員会議で永戸さんの訃報にふれ、それが永戸さんとの思い出を語る場面があった。私自身も、それほど話しもしていないのに、心の中の葛藤や揺らぎや曖昧さを厳しく見抜かれ、目の覚めるような言葉をかけてもらった記憶がある。「人を知ること」、人間という存在への絶対的な信頼、その根幹をしっかりと軸に据えて想いを受け継いでいかなければと思う。

障害を負っても生きようとした力

東京中央事業本部 神戸川 歩

永戸さんという人物がどのように形

づくられ、また協同労働の基盤がどう作られていったのかを感じられる一冊でした。

学生運動の場面は、私には馴染みがなく理解が難しい部分もありましたが、一貫して「主人公性」にこだわっている点や様々な人との協同や運動面が描かれ、協同労働の根の部分が垣間見えました。

幼少期に過ごした場所で人情や共に何かをすることの楽しさを感じ、薬局の商売を通じて人との関係づくりの面白さを知る。学生運動では「真剣に訴えれば仲間が応えてくれる」という実感や、自ら学び責任を負うことの大切さを学ばれ、センター事業団の設立後には現場の声に耳を傾け、「労働とは何か」「よい生活とは何か」を深く考え、「働く人が主人公になるとはどういうことか」「なぜ労働者協同組合で働くのか」という問いを持ち続ける姿勢に、強く心を動かされました。

私たちが今、組織として当たり前に行っている「1・2・3運動」や「よい仕事集会」等にも、強い思いや土台があったのだということであらためて知ることができました。

特に心に残ったのは、お姉さんの子どもが障害を持って生まれたときのエピソードです。「本人は生きようとしたから水頭症にもなっている。生きようとしている子を死なせるなど絶対にあり得ない」という永戸さんの言葉に、はっとさせられました。障害を「障害を負ってまでも生きようとした力の証」と捉える視点に、これまでにない気づきを得ました。

また、「自己否定ではなく、自己の再創造」とする永戸さんの捉え方も非常に心に残りました。自分を否定するのではなく、その自分を抱えながら新しい状況に向き合う姿勢、その考え方に深く共感しました。

これまでの研修などでも労協の歴史

については学んできましたが、こうして一人の人生の中で紡がれてきた協同労働の歩みに触れることで、より深く実感をもつことができました。そして、このことを今後、センター事業団で働く仲間たちにもしっかり伝えていく必要があると感じました。

弱さや変化も語られ、ホッと

東京東部事業本部 大場寛

私は98年に入団した。偉大なリーダーでありつつも、生い立ちから家族への思い等、ご自身の弱さや主義主張の変化も語られておりホッとしました。

永戸さんは社会運動を大衆的かつ市民の参加として拘り続け、その中でも労働運動は組合員が主権者・主体者となり、「事業性」と「協同労働」を確立していく方向性を示した。また、「普通の人」が社会に参加できる仕組みと学びあいの大切さ、一人ひとりが「自立・協同・連帯」することを徹頭徹尾呼びかけてきた。何のためにこの組織が生まれたのか、原点をしっかりと捉えていかなければならないと思います。

今、コンプライアンスが私の頭の全体を覆っていますが、バイト時代のエピソードの中で、「コンプライアンスの上に行くものは正義だ」「この店を盛り立てる」「みんなが幸せになる社会をつくる」とかの目標実現のために判断基準があった、というところは、日々の仕事の価値を考えあい、仲間を尊重しあい、仕事の先にある社会とつなげること…よい仕事と協同労働の判断基準としても意味づけたい。

次男がお亡くなりになられてから、人を責めるのではなく、しっかり考えることを求めるようになったところ…私も公の場でよく怒鳴られ悔しい思いもありましたが、実は永戸さんは後で必ずフォローして頂く。理事になり数年が経ち、こういうリーダーになると決めました。

何度も「コノヤロー」と思った

埼玉事業本部 成田誠

永戸さんと最初に直接会ったのは、入団した03年に受けた妻沼ほほえみのヘルパー講座の特別講義の時でした（眼光鋭く、ただものではないなど思った）。その後、群馬の所長をし、墨田の立花児童館立ち上げの館長になりました。無茶苦茶なことも言ってくるので、何度も「コノヤロー」と思ったこともありましたが（笑）、逆に火をつけられていたのかも。

正月は家が近かったこともあり、必ず永戸さんの家の新年会にギターを持ち込んで大合唱をしていました。卓君がなくなり、コロナ明けで初めてやった新年会に小澤君と奥さん（フルート奏者）が来て、ギターとフルートでみんなで谷村新司の昴と美空ひばりの川の流れるようにを歌ったら、永戸さんがぼろぼろ泣いていたのは今でも忘れられません。

本の感想に入りますが、永戸祐三という人間が形成される子ども時代から学生運動時代。その様々な体験や経験から今に至る根源的なものの捉え方がこの時代に確立されたのだと感じる言葉が随所に出てきました。

「自分から喧嘩を仕掛けたこともないし、敵を作ることとはほとんどしなかった。自分から敵を作るということは、自ら認識を狭くし、意味がない」

「何かをまろうとすると反対する人も生まれるが、本当に真剣に訴えれば、真剣に応える仲間も多い」

「コンプライアンスの上に行くものは正義」

「自分が納得しないのに、決定だと言われて従つのは自主性も主体性もない」「まてめは参加者をどういう思いにさせるべきかを考える。参加者が少しはやらねばから、さあ始めようと思える状況を作るのがまてめ」

そして事業団から現在までは、労働者協同組合・協同労働という概念がほとんど存在しなかった日本社会において、どうすればこれが社会に根付くのかを考え続けた軌跡が余すところなく描かれ、労働者が社会の主人公になる、そして労働者・市民が地域づくり・社会変革の主体者になることを追求してきた人生が、ある意味ドラマティックに描かれていると感じました。

個人的には、迷ったり悩んだり、これからどうしようかと思ったときに絶対に役に立つ、バイブルのような本になると思いました。

「仕事おこしは労働者の能力を高め、地域のネットワークを強め、運動的な深まりと共に新しい生業を創る。よい仕事とは協同労働で新たな仕事を作ることだ」

「社会の最も困難な事態に直面して、うちはまだ実力がないうからと逃げていたら、ワーカースコップは社会的存在になりえない」

「苦勞しそつだ、しんどそつだ、しかし社会には必要だという所に恐れす突っ込んでいく姿勢」

「どこが焦点なのかを常に考え、中心スローガンを示し、次に進むべきところを提起する」

「社会のあらゆる分野に協同労働の基礎を創り上げる」

「七つの原則と労協法を自由自在に使いこなせる事業所・組合員になる」

「地域の衰退を食い止め、活性化するテーマに真正面から立ちむかう。その時重要なのは自分たちだけでなく、社会連帯による仕事おこしを進めること」

とりわけ埼玉の未来にもつながる農業についての言及がとても多く、第1次産業は協同労働で再生・復興させるべきだと書いています。

生涯最後の取り組みの一つとなった桶川北本サミットを通じて、滝瀬塾の創設を提起したのは永戸さんでした。

またワーカースの発展の力ギは「社会連帯経営」であり、「社会連帯を通じてワーカースがコミットすべき領域を広げること」が何よりも大事になると我々に問いかけているように思います。

協同労働が社会に位置づく日を夢見て、逃げるに挑戦し、格闘し、可能性を広げてきた、ワーカースが発展するためには何をすべきかを本質的に追いかけてきた人生だったのだと思います。

一番の供養は埼玉が発展していくことだと思っています。

「己が何を為すか」「独裁的に

北関東事業本部 相良孝雄

生前、「自分は人たらし」もすると話されていたが、根っから人が好きな永戸さんだった。労働連理理事長退任（17年）のあいさつでは「愛」という言葉を多く伝えており、愛・仲間・同志など、人間として生きる上での根源的・根本的・原則的な哲学を持たれ、実践されていたことに、深く共鳴・共感する自分もいました。

本著は、「人間らしい社会をつくるために、協同の力で社会変革をしていく指針を示すバイブル」であると考えています。協同の力で社会変革の指針を示すといったときに、その背景にある永戸さんの歴史が欠かせない。それは永戸さんが長い間、労働者協同組合運動、協同労働運動のトップリーダーであり続けるとともに、それだけには収まらない社会運動・労働運動にも多大な影響を与えたからだ。

協同は「自治」が基本だが、それとともに「自立」「自律」も含めたリーダーの強い「意志」が必要であるとも考えている。生前、永戸さんとの会話で「独裁的に決めることも必要」と話された場もあった。協同労働として、一人ひとりの主体性を引き出すことが大切であるとともに、「己が何を為すのか」というトップリーダーとしての明

確な指針・思い・使命・生き方を示したことが「独裁的」という言葉にもつながっていると考えている。

そのような人間的な生き方、思い、振る舞いが多くの人に影響を与え、労働者協同組合運動、協同労働運動が発展する原動力になったと思うし、私もその一員として尽力してきました。

社会が閉塞するなかで、労働・地域づくり・協同の視点からオルタナティブを示し続け、社会づくりをしてきた実践と哲学が本著には詰まっている。

最後に、この本を発刊してきた背景に松沢さんの存在があることを忘れてはいけない。半世紀以上に渡り、永戸さんと歩んできたからこそわかる生き様、伝えたいポイント、社会にとっての意味など、松沢さんなしにはなしえなかった本であったように感じた。永戸さんの人生が書かれた本が残せてよかった。後世に伝えたい。

郵政民営化選挙問われた面接

南東北事業本部 小椋真一

20年前、就職超氷河期の真只中、追い続けた夢も半ばに結婚・出産で、いよいよ自身も追い詰められ、いざ飛び出した社会で連戦連敗の就職活動に自暴自棄になる事もあった中、本当にタイミングよく誘われた協同労働という世界に事務局員候補として飛び込む際、永戸さんに最終面接で当時世間を賑わせていた郵政民営化選挙について問われたことを今でも鮮明に覚えている。社会の何たるかも知らない未熟者に滾々と民営化の悪影響とその根本を説かれ、「物事の根本に照らして自ら捉え行動できる人間になれ」と言わんばかりに採用が決まる。

その後偶然にも若者自立塾という社会の根底で悩み苦しむ若者を直視する現場に赴任が決まった事も幸いして、永戸さんの言う「大衆運動から社会を変える」行動を一部でも体现する事が

出来た(事業は終了)。自分自身、協同労働と若者支援とが直結した経験は何物にも代え難く、今でもここでの経験が全ての基になっている。

加えて、自身も積極的に取り組んできた中村哲医師の映画上映運動は、永戸さんと哲さんの哲学が一致する部分がとても多く、映画の企画制作と労協法施行が必然であったのだと改めて気付かされ、事実、全国各地に感動と共感の渦を巻き起こしている。

この大衆運動をこれからどう発展させていくのか？協同労働に関わる一人ひとりの主体性・主人公性・自発性、つまり「当事者性」こそが発展の原動力なのだという教えが心に残る。当事者性をとことん問い合い、その局面、局面で共感し合える焦点を行動と共に模索し続ける中で、「労働が資本を雇う」社会が見えてくるのかもしれない。

考える前に動け！進んでいばらの道を選べ！！そんな叱咤が記憶の片隅に…でも確かに脳裏に響いてくる。

人の変化機敏に察し言い回る

南東北事業本部 岩城亮平

今の組織の成り立ち、今あることがどうやって形作られてきたのか、そこに何の想いや理念があったのかを知れたのはとても勉強になりました。改めて永戸さんがその時々で何を思っていたのかは知る由も無かったですし、なぜそういうことを言っていたのかも振り返ると、「そういうことだったのか」と腑に落ちる部分もありました。

また、第二章の『「自己否定」ではなく「自己の再創造」「自己変革」だ』は、自分自身も「現状のままではいけない」と「強迫観念」的な思考があったので少し救われました。過去も内包しながら、自分自身が考えて変化・成長していくことなんだと思います。

永戸さんは人の変化をとても機敏に

察する人だなと思っていたのですが、そういった考えがあったからこそ、その変化に喜んだり、面白おかしく（決してネガティブではなく）人に言ってみたりしていたのかなと思います。

また、「言っても聞かないやつがいる」的なことが書かれていて、今のリーダーが感じていることと同じような状況の中で、これだけのことを進めてきたんだなと思ったり、「決意と覚悟があるのなら」のくだりは、色んな意味でもとても重たいなど感じます。

亡くなられたことに実感が湧かず、率直に感想を書くのが難しいです。少し落ち着いたら繰り返し読もうと思っています。

必ず言われた「翔け！」「翔べ！」

北東北事業本部 坂本典孝

生い立ちから書かれてあった中で、特に中学生時代から先生に対して異議申し立てをしている場面など、その当時からであつたのかと、若干笑いながら読み進めていた。学生運動時代の記述も然り。私はその世代から35年ほど後に生まれているが、改めて社会の矛盾の変革に立ち向かおうとする力が当時はとても大きくあつたんだなと感じる。今の自分は根本的には何を目指し、何を創つていこうとしているのか、今一度見つめ直さなくてはならない。

労協の様々な岐路の中で、永戸さんの葛藤や模索がリアルに書かれていた。様々な場面で悩み、しかし正面から事に迫り、超えていく。簡単に誰もができることではないが、そうした姿（背中）に信頼が寄せられ、その積み重ねが今のワーカーズコープの基礎となっていることはいうまでもない。

時代がどんどん進んでも、唯一変わらないのは、人と人の信頼関係（つながり）から新たな取り組みが生まれ、新たな「協同」「連帯」の動きが育まれ地域社会が動き出していく事だ。それ

は、永戸さんをはじめ労協の先人の方々が示されてきたことであるし、私自身もその力と出会えた時に大きな喜びや楽しさを実感できた。だからこそ、内にもたず地域に出ていくこと、新たな挑戦をし続けていかなければならないという事が今では理解できているつもりである。

労協に入り20年。私自身が最初に全国異動を命じられた時や、他のポイントになる場面で必ずと言っていいほど永戸さんから「翔け！」「翔べ！」と言われたことを思い出す。その言葉が私自身の背中を押すだけ意味の深い言葉であつたかという事を、「今こそ思い切つて翔ぶときだ」という最後の言葉に出会つて改めて痛感した。

永戸さんと同じようにはできないが、「愛」をもって人・組合員に伝えられるようなリーダーになりたい。

胸熱くイメージ湧いた方針提起

北海道・北東北・南東北 三船洋人

永戸さんは、協同労働という働き方、働くという事、生きるという事とは何かということに、大きな示唆を与えてくれた。永戸さんの方針提起はこんなことをやってみたいと思えるほどに言葉に力があり、胸が熱くなり、具体的なイメージが湧き、すごさを感じたが、その理由を本の中で実感することが多くあつた。

組織の成り立ちや歴史を、永戸さんの経験を通してよりリアルに感じたことはすごくよかった。この思いを永戸さんと共有できないことがすごく寂しい思いもあるが、その気持ちを周りと共有できるようにしていきたい。

なぜ？何のため？ 問い持ち続け

北海道事業本部 石本依子

総代会で著書紹介を聞き、さっそく読み始めました。自伝とはいえ、現代史のテキストのようつでとても興味深

く、最後まで一氣に読みました。もう一度読み返したいと、いまパラパラとページをめくっているところです。

労協法講座でワーカーズコープの歴史を話す機会も多くありますが、年表やパンフレットや35年記念誌などではわからなかった、時代を走り抜けてきた生の声が聞こえてきました。なぜ？どうして？何のために？という問いを持ち続けることが、社会を変える大きな力になるのだと思いました。自分と仲間を信じることを徹底的に追求してきた姿に感動しています。

前半部分を読みかけていた感想を病床の永戸さんにお伝えしたところ、「あとでサイン書いてあげる」とおっしゃっていたのに、叶わなかったことが残念ですが、このような本を残していただいたことに深く感謝します。

厳しいが本当に優しい人だった

日本社会連帯機構 稲葉健太

私の人生を変えてくれた労協。株式会社へ再就職するか、適当に生きていくか、30歳の時の決断。入団1か月後の衝撃―全国代表者会議まとめで、はじめて永戸さんの話を聞く―衝撃を受けた。

昨年12月14、15日の社連20周年総会終了後の打ち上げにも参加していて、翌16日に緊急入院されました。体調は悪そうだったのに、もう少し気にかけるべきだったと悔やまれます。

2月5日に退院され、自宅にお見舞いに行きましたが、「ワインを買つてこい、赤と白1本ずつ」と。おでんとキムチ鍋も大量に作っていてくれ、焼酎や日本酒も飲んでかなり酔い、いつも永戸さんだ、復帰も近いのではないかと安心する場面でした。ゆるやかに出勤もされていたので、今回の急変に驚くばかりでした。

常に人間や社会の本質を考えろ、社会や地域を変える大衆運動の視点を持

て、社会連帯運動がこれからの地域社会の中心軸になる、みんなで料理をつくり、楽しく飲むこと、口癖のように言われました。

また、全日自労から事業団、センター事業団、地域福祉事業所、協同労働運動、最近では特に社会連帯運動、法制化運動等、先見性・発想の飛躍と、常に新しいことへ挑戦する姿勢、そして学習する力など「革命家たれ」という言葉が思い起こされます。

厳しいところもありましたが、本当に優しい人だったと思います。怒られても鼓舞されても、永戸さんと話をすると、本当に元氣とやる気を何度も何度ももらいました（一度本気で怒鳴られたときは怖かった）。

あとがきを読むと涙が止まらない。

悔やまれること、悲しいこと、偉大な人を失ったこと、残った我々の覚悟が本気で問われる。今、労協運動の中心テーマは社会連帯経営で、社会連帯機構の存在と役割が問われている。そこに関わる一人として永戸さんの遺志を少しでも実現、引き継いでいけるよう努力、学習、行動していく所存です。

いつもニコニコ、恐縮した握手

本部事業推進本部 小林文恵

入団して丸17年になりました。永戸さんに直接お会いできたのが、10年に松戸地域福祉事業所あじさいの所長になり、所長会議に参加するようになったからです。所長になりたての時は、理事長と直接お話しすることなんてないと思っていました。

そんな中、所長会議の受付でいつもニコニコされ、入ってくる方たちを迎え入れ、終了時にも会場の出口に立たれて握手をしてくださった方が永戸さんでした。所長会議の中の挨拶での永戸理事長に恐れかしこみ、またニコニコして握手してくださる永戸さんにとっても恐縮したのを今でも覚えています。

著書を読み、印象に残ったのは2000年の経営危機のところでした。「その組織が社会の中でどういう位置を占めるのか、そのためにどのようにやっていくとするのかが経営の根本」と書かれていました。現在赤字が2年続き、経営改革をなんとしてでもやりぬかねばならない今、この一文に我々の活動が問われていると思います。

当時の議論を聞いてみたかった

本部総務 藤谷英樹

「社会をより良くしていく、世界を変革していくために自己を絶え間なく変革する」と、個々のあり方と合わせた社会運動の考え方は明確であり、永戸さん自身、歳とともに「どんどん変わった」と振り返られ、「自分が本当にやりたいことは何かを考え、新しい状況をつくる」とする「ことに躊躇してはいけないのだ」ということも「よく言われていたなあ」とハッとさせられた。

中高年雇用・福祉事業団が労働者協同組合に発展していく道を歩むことになったところは、鳥肌が立つような衝撃を感じた。菅野正純さんが受けた感動と永戸さんの抵抗感。その後、「労働者協同組合」を宣言するに至った当時の幹部の方々の議論をその場で聞いてみたかったという叶わぬ夢を追っている自分がいる。

スタート時点から、何をめざして労働者協同組合運動をどう展開していくのかというビジョンを掲げて歩み出したことも、「社会変革」を絵空事にしていなかったことを証明しており、本当にすごいことだと思う。

2000年の経営危機も、目先の経営数値の改革に止めず、「本格的な社会投資の第一弾でもあった」という見方をされ、今の私たちの組織改革についても、縮こまらずに5・10年先のセンター事業団と協同労働運動を見据えて挑戦していく姿勢を失わずに取り組ん

でいきたいと改めて考えさせられた。

バトンは一人ひとりに託された

本部専務 小林勲

「協同組合は資本主義の補完物にしか見えない」という内橋克人氏の根源的な問いに対して、労働者協同組合は協同組合精神を体現する存在になれるのか、すなわち労協法「第一条」の体現者となるのかが問われていると感じた。

レイドロ―報告「労働が資本を雇つ」に関して、永戸さんは労働者協同組合運動は「当事者運動」であり、そこにおける労働―協同労働」は、「他人に支配されない労働」「私自身の労働」であり、「自らを社会となす」ということにつながっていくと指摘している。

永戸さんは「現在の法体系とギリギリ矛盾しない形で労協法はつくられた」と述べ、「労働法に協同労働は位置付けられていくものなのか」と提起しているが、果たして労働法制の中に「労働者」とは別に「協同労働者」が位置づけられるようにすることができるのか。大変な宿題が残されたように思う。

「高度化した資本システムは労働を無力化していく。労働と人間発達、労働と社会経済の充実・発展をどう考えるか。労働とかけ離れていく人間・人類に未来はない。」という言葉にとても共感した。テクノロジーやIT技術の発展、過度な便利さは、人間が本来もつ力を奪つような節があると感じている。今、社会に急速に浸透する生成AIなどは、業務の効率化は確実に上がるが、労働の無力化や人間発達の観点からも、その活用のは非や使用範囲の制限も検討すべきではないかと思う。

永戸さんが愛した「センター事業団」、そして「ワーカーズコープ運動」を、労協法がある今、どのように成長・発展させていくのか。この自叙伝を通じて、役員・リーダー、そして組合員一人ひとりにバトンは託された。